



三位一体の主日 (ヨハネ 16:12-15)

父と子と聖霊を等しくたたえる

三位一体の主日を迎えました。三年かけて、三位一体の主日を学ぼうと取り組んでおります。今年はその三年目です。今年「聖霊なる神」について考えてみたいと思います。

黙想会に参加してきました。田平教会にも来てくださった大阪の酒井補佐司教様が説教師でした。いつもですとメモをしっかりと取るのですが、今年はメモを取るよりも話に聞き入りたいと思うような講話でした。最後まで、メモを取らずにずっと話に耳を傾けておりました。

一応、聞き直しができるような準備はさせてもらいました。長崎への移動の時などに聞いてみようと思っています。とても聞きやすい声で話してくださり、田平の時と同じように資料をスクリーンに映し出しながらの講話は分かりやすかったです。

三位一体の主日を「御父」「御子」「聖霊」と学ぶ三年目です。一点だけに絞ります。聖霊を取り上げるときに聖霊だけを強調することのないようにしたいと思います。たとえば聖霊運動などはそうでしょう。カトリック教会の中で聖霊の働きかけを特別視する集まりです。

私は一度、福岡の大神学校で助祭の時に病人訪問をお願いされて信徒のグループと一緒にある家庭を訪ねました。実習先の教会信徒だったので訪問の許可は主任司祭から得て出かけました。私が聖体を授けた後、「病人に聖霊の特別な癒やしを願いましょう」と誰かが祈り始めました。すると皆が恍惚状態になって、ある人は異言すら語り始めました。私は怖くなって、そのグループとは病人を訪ねなくなりました。

聖霊の特別ないやしの働きを願うことは、悪いことでは無いと思います。けれども、聖霊を特別視するのは問題があります。今日朗読された福音の中で「その方は、自分から語るのではなく、聞いたことを語る」(16・13)とありますし、「(その方は)わたしのものを受けて、あなたがたに告げるからである」(16・14)とされているのです。

つまり、聖霊の働きは御父と御子から出るもので、決して聖霊が一人歩きしてあっと驚く癒やしを施したりはしないのです。癒やしが与えられる時それは、「御父と御子から、聖霊を通して」与えられるのです。私がそれと知らずに聖霊運動のグループと病人を訪問し、直感的に「これは何かがおかしい」と感じたのは、聖霊の働きを熱心に願ってはいいても、授けられた御聖体以上に聖霊の働きを特別視していたことでした。

聖霊は必ず、賜物を与えてくださいます。それは同時に、「御父」と「御子」からもたらされる賜物です。それ以外の、聖霊だけが特別視された恵みを願うべきではないと思います。私たちは長く聖霊の賜物をいただける世代です。だからこそなおさら、「父と子と聖霊」を等しくたたえる恵みを願いたいと思います。